



©ADAGP Paris & BCF Tokyo, 1992

神よ、我を憐みたまえ、御身の大きいなる慈悲によりて
(『ミゼレー』より) 1923年

生誕120周年記念

ジョルジュ・ルオー 名作版画展

l'œuvre gravé de ROUAULT

'92年4月11日(土) - 5月10日(日)

高松市美術館 高松市紺屋町10-4
Phone. 23-1711

開館/午前9時～午後5時<入室は午後4時30分まで>
(初日は午前10時より開展、毎週金曜日は午後7時まで)
毎週月曜日休館(但し、5月4日(月)開館・6日(水)休館)

■主催 = 高松市美術館・四国新聞社・西日本放送

ジョルジュ・ルオー名作版画展

Kœuvre gravé de ROUAULT

哲人ニーチェは19世紀末に「神の死」を宣言し、宗教学者マックス・ピカートは現代を「神よりの逃走」の時代であると糾弾しました。このように、ヨーロッパ精神の中核を担ったキリスト教精神は、19・20世紀において疲弊していると言われています。アメリカの美学者カーステン・ハリーズは、神と人間の間に立ちはだかるこの空隙を「ニヒリズム」という言葉で表現しました。

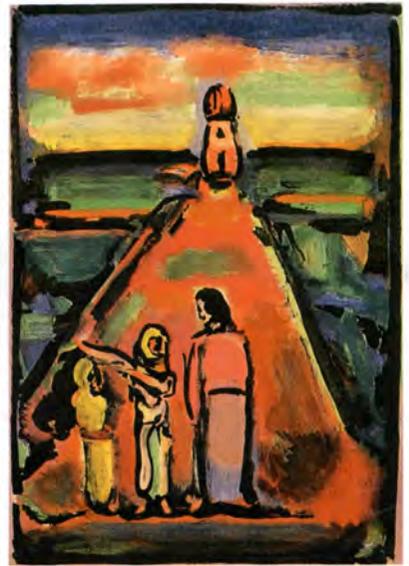
このニヒリズムの時代にあってジョルジュ・ルオー(1871~1958)は、娼婦・裁判官・道化師といった非宗教的の主題を描くときにも、常に神と向かい合い、神の前にある人間の悲哀や、裁判官・ブルジョアなどの傲慢さを表現しました。そして罪の糾弾の厳しい眼から愛と許しと共感の眼へと移行するに従い、彼の版画作品は白黒の厳しい構図から神秘的光の輝く色彩の世界へと、様式を変化させてゆきます。

19世紀末において宗教画は数の上では決して少なくありませんでしたが、そこには精神が欠如していました。絵画は決して文学の絵解きであってはならないと考えていたルオーは、版画の制作をも聖書の説明としてではなく、自分の生の真髄としての宗教的感情の表出にまで高めたのです。ルオーが20世紀の唯一の最大の宗教画家と呼ばれる所以がここにあります。

本展は、この偉大で聖なる画家の生誕120周年を記念して企画されたもので、『ユビュおやじの再生』『ミゼレーレ』『悪の華』『流れる星のサーカス』『受難』など、総点数約190点により、ルオーの版画芸術の全貌を紹介しようとするものです。



バンブー踊り(『ユビュおやじの再生』より)
(ミアチュール版) 1955年



出会い(『受難』より) 1936年



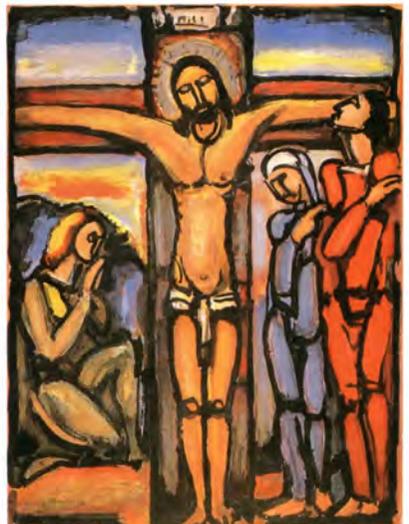
骸骨(『悪の華』より) 1926年



裁判官(『悪の華』より) 1938年



苦いレモン(『流れる星のサーカス』より) 1935年



十字架上のキリスト 1936年

入場料	当日	団体/一般前売
一般	700円	560円
大学・高校生	400円	320円
中学・小学生	200円	160円

団体は20名以上

講演会のお知らせ

「ルオー版画の魅力」

講師/木島俊介(共立女子大学教授)

4月19日(日)午後1時30分より

美術館講堂にて

次回の展覧会のお知らせ

「アメリカの遺産 絵画の150年」

8月7日(金)~9月6日(日)

アメリカ合衆国オハイオ州の全面的な協力を得て、ホーマー、ホッパーなど150年にわたる第1級のアメリカ絵画を展覧いたします。